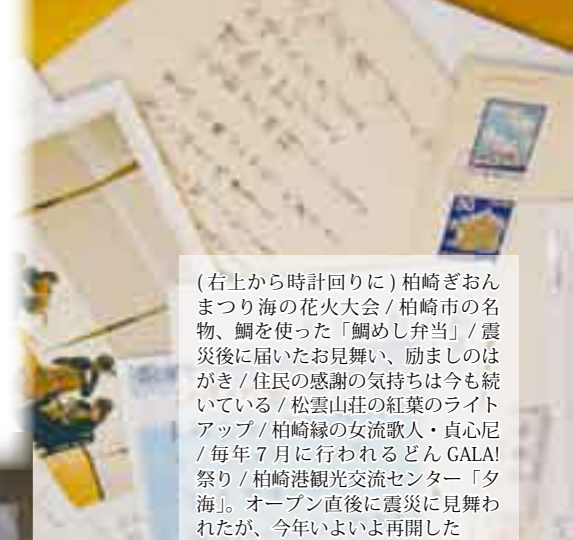


「復興」それは新しいまちづくり

震災から力強く立ち上がる柏崎

三年間で二度の大地震に見舞われ、大きな被害を受けた柏崎市。しかしそれに屈することなく、震災から得た経験と人々のつながりを活力として、新しいまちづくりに取り組んでいる。未来へ元気に歩み出す、柏崎市の姿にスポットを当てた。



(右上から時計回りに) 柏崎おんまつり海の花火大会 / 柏崎市の名物、鯛を使った「鯛めし弁当」 / 震災後に届いたお見舞い、励ましのはがき / 住民の感謝の気持ちは今も続いている / 松雲山荘の紅葉のライトアップ / 柏崎緑の女流歌人・貞心尼 / 毎年7月に行われるどん GALA! 祭り / 柏崎港観光交流センター「夕海」。オープン直後に震災に見舞われたが、今年いよいよ再開した

心後ありがとう



概要

中越大地震からわずか三年後の平成十九年七月、震度六強の地震が柏崎市を襲った。被害は人や建物・施設はもとより、原子力発電所への影響を心配する風評被害も重なって、観光交流産業へも広がった。その時、行政はどう動きどう対処したのか。このダメージから立ち上がるために、人々の支えとなったものは何か。そしてたび重なる震災体験は、新生・柏崎市にどう活かされているのだろうか。

CHAPTER 1 (P 8)

大地震発生！住民は、行政は…

また襲いかかった大地震。倒壊する家屋、続出するケガ人、遮断されたライフライン…突然の危機に対して、市の対応は、パニック状態の市内で、詳しい被害状況を把握するのは困難。そこで市が行ったことは。

CHAPTER 2 (P 9)

イザという時に地域力が問われる

この震災に、三年前の被災の経験はどう活かされたのか。その時、被災者たちの大きな力となったのは何だったのか。身体だけでなく、地震のショックや避難のストレスで傷ついた心をどのようにケアしたのか。

CHAPTER 3 (P 10)

災いを未来のパワーに変えて

交通や施設の被害とともに、原発火災による風評被害が観光業にダメージを与えた。観光客を呼び戻すために、行政はどうしたのか。二度の震災から得たものは何か。そして新生・柏崎がめざす未来とは。

新潟県中越沖地震——柏崎市の被害状況と対応

人とまちに大被害をもたらした震度6強

平成19年7月16日・午前10時13分に発生。震源のマグニチュード6.8、柏崎市では最大震度6強を観測した。全壊家屋1121棟、半壊家屋4583棟、死者14人。祝日(海の日)だったこと、夏季で食事時でなかったことなどが幸いし、火災は2件で市街地の火災はなかった。また、東京電力(株)柏崎刈羽原子力発電所では、地震発生時点で原子炉の運転は正常に停止した。しかし、3号機の変圧器で火災が発生し、後に風評被害を招いてしまった。

被災者への対応では、前回震災時の経験を活かし、避難所の設置、食糧供給、高齢者・障害者の安否確認などが迅速に行われた。また延べ19万人を超える公的人員、延べ約2万2千人のボランティアといった県内外の人的支援を受けて復旧が進行した。

〈主な被害状況〉

●人的被害	死亡者:14人けが人:1,664人(重傷217人、軽傷1,447人)
●住居建物被害	28,423棟(平成21年7月1日現在)
●施設被害	総額:2,264億900万円(住家、公共・文教施設、道路、河川、ガス・上下水道関係、農林水産関係など)
●交通機関の被害	国道:国道8号が全面通行止め(7日間)、国道352号が椎谷地区で通行止め(現在、復旧を断念しトンネル整備を開始) 鉄道:信越本線が全面運休(土砂崩れで59日間) バス:路線バスほぼ全便運休(2日間)
●ライフラインの被害	電気:停電23,300戸(2日後復旧)、水道:断水40,260戸(19日後復旧)、ガス:停止30,978戸(42日後復旧)

〈応急期～復旧期における主な対応〉

●避難所の設置	避難所数:82カ所(他に福祉避難所6カ所) 避難人数:ピーク時11,410人(延べ66,345人)
---------	--



震災後の様子

大地震発生！住民は、行政は…

駆けつける間にも家が倒壊していく

「つい三年前に起きたのに、まさか！というのが実感でした」と当時を振り返るのは、柏崎市危機管理監の須田幹一氏。その日は休日でも外出していたが、地震発生後すぐに市役所へ向かった。道路が被害にあり、信号機も止まっている。途中、傾いた家が倒壊していくのが見えたという。発生約二十分後には市長が到着。十時五十三分には、市庁舎四階に災害対策本部が設置され、情報の収集



倒壊した家屋。突然の震災で全壊した家屋も多かった

活動が始まった。午後には全職員千七十五人のうち八割が登庁していた。午後三時に第一回本部会議が開かれ、避難所の開設状況、火災救助や病院の状況などが報告されたのだった。「前回の震災を教訓に、緊急時の準備ができていたから素早い対応がとれた」と須田氏は語る。

できるだけだけの情報を市民に提供

とはいえ、全体の被害状況を把握するのは困難だった。一一九番通報が殺到し、怪我人・重傷者が次々に

搬送されて救急病院の外来はパンク状態。多くが近隣の医療施設に移送された。市職員は受け持ち地域の情報収集に駆けつけたが、家屋の倒壊状況や住民の安否確認もままならなかった。そこで市は、まず市民の各家庭に設置した「防災行政無線放送」で、津波情報や交通・ライフラインの現況、原子力発電所の情報、避難所の案内など、できるだけの情報発信し続けた。さらに地域のコミュニティ放送局の「FMピッカー」も全面的に協力し、二十四時間態勢で震災情報を市民に提供した。

イザという時に、地域力が問われる

三年前の震災経験が随所で活かされる

中越沖地震では、その他にもさまざまな対応において前回震災の経験が活かされている。例としては、まず避難所の認知が行き渡っていたため、避難が比較的スムーズだったことが挙げられる。地震発生から即時設置したことで午後には自衛隊が到着し、被害者の救出や安全確保、給水などの支援が迅速に受けられたのもそのひとつ。救急

医療では、新潟市民病院DMAT（災害医療チーム）の合計四十三チームが、その日のうちに応援に駆けつけてくれた。

また、地域での自主防災会の活躍も見逃せない。柏崎市では、地域を昔からの基本的な小学校区によって三十一に分け、各地区が「コミュニティ」として独自の活動を行っている。とくに三年前の震災で市内最大の被害を受けた北条地区では、普段からコミュニティの防災活動が盛んで、毎月防災訓



商店街も大きな被害に見舞われた

練を実施したり、防災携帯無線を整備するなどの準備をしていた。小学校の運動会でも、防災活動が競技となっているほどだ。それが大きく機能して、避難誘導や住民の安否確認が円滑に行えたのだ。

何よりも「人の応援」がありがたい

災害時の犠牲となりやすいのが高齢者や障害者だ。そこで日頃から彼らの状況を知っている市の介護高齢課職員

や、民間の障害者相談支援センター委員らが、数日かけて安否の確認を行った。倒壊家屋の巡回には多くの警察官や警察犬が動員された。食糧や飲料水など物資の支援も重要だが、大災害の直後に必要なのは、やはり人手である。自衛隊や他の市町村の消防・警察などの支援とともに、大きな力となったのがボランティアの活動だった。県内外から延べ二万七百人を超える人々が支援に訪れ、避難所での様々な手伝い、家の中に散乱した家財道具の片づけな



(上) 自衛隊による給食サービスは、地震直後から行われ、ピーク時は54箇所で行われた。(右下) 県内外から保険師5686名が派遣。避難所におけるサポートのほか、被災地全土を訪問しニーズ把握に努めた。(左下) 震災で散乱した家財道具を片付けるボランティア。作業だけではなく、元気づけられることも多かったという。



どを熱心に行ってくれた。市では災害ボランティアセンターを設置し、福祉協議会の職員が受け入れや活動の差配など仲介の役割を果たした。住民も、はじめは「助けてもらうからには、お茶くらい出さなければ」とか「なにもお礼ができないから、悪いから」と遠慮する声もあったが、次第にボランティアのあり方（無償で、お礼はもらえない）を理解するようになり、支援は進んでいった。

ハードの支援とともにソフトのケアを

震災は体だけでなく、心にもダメージを及ぼす。地震のショックや恐怖心がトラウマとなつて、後々まで被災者を苦しめるのだ。また避難所生活が長引くことによるストレスも心を蝕む。市は住民の精神面のケアのため、避難所へ医療チームとは別に保健師や心の



柏崎市危機管理監 須田 幹一 さん

健康調査をする「こころのケアチーム」を被災地スタッフの要請に応じて派遣して巡回訪問を行った。家を失った市民は仮設住宅に転居したが、全部で千七戸の仮設住宅は一カ所に集めるのではなく、市内のコミュニティごとにそれぞれ建設したため、知り合いが多い中での暮らしになり、心の負担が少なく安心して住むことができた。さらに県の復興資金を利用し、「こころのケアセンター」を市内に設置。現在も無料での相談に応じている。



柏崎市復興支援室 室長 白川 信彦 さん

「個人だけでなく、やはり日頃から地域での準備が大切だと痛感しました。イザという時に地域力というものがないと試されません」と柏崎市復興支援室長の白川氏。現在、柏崎市では市民の八十五パーセントが地域自主防災会に加入している。震災に遭ったことで、地域のつながりや結束力は確実に高まった。

災いを未来のパワーに変えて

風評被害も重なり観光業に大ダメージ

震災は、柏崎市の重要産業である観光業にも大打撃となった。折しもこれから夏休みに入り、本格的な海水浴シーズンを迎えようとする矢先に、鉄道・道路や海水浴場の施設が被害に遭ったのだ。海の大花火大会で知られる「ぎおん柏崎まつり」も中止になった。また、柏崎刈羽原子力発電所の火災による影響も大きかった（実際には地震発生後、原子炉は正常に運転を停止し、放射能漏れも人体にまったく問題のないごく微量のものだった）。何も心配はないと県知事も新聞などでアピールしたが、前年は百万人を超えた海水浴客



観光交流課 課長 渡部 智史 さん

は、風評被害で十六万人にまで激減してしまった。

そこで柏崎市は、やはり地震で被害をうけた刈羽村・出雲崎町と広域で連携して、八月末に「柏崎地域観光復興推進協議会」を立ち上げ、協同で観光ピーアールに取り組むことにした。しかしその年は復旧に専念せざるを得なかった。

激減した海水浴客を呼び戻せ！

「本格的にピーアールを始めたのは翌年五月の連休明けから。上半期が勝負だと思った」と、柏崎市産業振興部観光交流課の田村光一氏は語る。ポスター、雑誌広告、新聞、ラジオなどのメディアで、風評を振り払うべく安全な海水浴場をアピール。例



観光交流課 課長代理 田村 光一 さん

年訪れる人の多い関東圏（群馬、埼玉など）へは観光誘客のキャラバンにも出かけた。また、NEXCO東日本とのタイアップで、高速道路の「夏割・海水浴バス」を発行した。以前からリピーター客に誘致ハガキなどを送っていた浜茶屋（海の家）・旅館・民宿も、安心を訴えた。

海水浴シーズンの前、毎年六月十四日から十六日に開催され、約一キロに渡って縁日の出店が並ぶ『えんま市』は、例年通り二十万人の人流で賑わった。そして「ぎおん柏崎まつり」も復活し、その夏の海水浴客数は七十二パーセント以上回復して、七十五万九千人になった。

「實際来てみたら、海はきれいで何の心配もなかった」というお客さんの声が多かったと、田村氏は胸をなで下ろしたという。

強くなった、つながり、で通年型の観光交流を

施設は復旧し、今年は天候不順とはいえ、さらに海水浴客数の回復が見込まれる（平成二十一年八月上旬現在）。しかし、いつまでも夏季の観光だけに頼る「海の柏崎」であってはいけないと、柏崎市観光交流課長の渡部智史氏は話す。



「海中空スターマイン」「尺玉三百連発」「尺玉百発一斉打ち」など、勇壮な海上花火を満喫することができる。

柏崎ぎおんまつりと海の花火大会

夏の柏崎を代表する風物詩。見物客も巻き込みながら踊り歩く「民謡街頭流し」、山車や神輿で勇ましくねり歩く「たる仁和賀」などが行われる。とくに約一万五千発の花火が夜空を彩る海の大花火大会が有名で、毎年二十万人以上の見物客が訪れる。



江戸時代末期に建てられた「六宜閣」（国の登録有形文化財）で提供されている鯛料理。

名物・鯛料理

市内の宿泊施設・レストランでは、地元の鯛を使った料理が評判で、県外からも観光客が訪れている。柏崎市では人気の「鯛めし」「鯛茶漬け」などの鯛料理を、柏崎名物としてアピールする取組が進められている。



柏崎七街道のうちの「北国街道」にある松雲山荘のライトアップ。11月上旬から下旬に行われる。大正時代に造園された庭園にある数百年のもみじは、全国でも屈指の紅葉スポット。



「北国街道」にある牛が首屈内稲曲。大露頭は東洋一とも言われている。

「じよんのび街道」にある萩/鳥かやぶきの里と、七街道のパフレット（右）

越後柏崎七街道

古くから北国往還の要衝であった柏崎は、主な街道沿いに多彩な地域文化が生まれている。その温故から今様までの多彩な土地柄を、「越後柏崎七街道」（北国街道、綾子舞街道、からむし街道、じよんのび街道、鱈石街道、北条毛利街道、石油街道）と命名。現在、ガイドブックも作成されており、柏崎の魅力を体系的に知ることができる。

「観光交流人口を増やすためには、一年を通して観光客を呼べる柏崎の新しい魅力の開発やアピールが必要。二度の震災で強くなった地域のつながりや結束力を、それに活かしたい」

そこで現在推進中なのが、市内に広がるコミュニティを七つの街道でつなげ、地元の歴史・文化の魅力を掘り起こしていく「七街道」事業だ。点在する史跡・観光スポットを、「越後柏崎七街道」の名のもとに結びつけて、市全体を活性化する試みである。また、食に関する名物づくりでは、「鯛料理」に注目している。柏崎市笠島沖は鯛の産卵地で、鯛の水揚げ量が県内トップクラス。今年十月から十二月にJ.Rと地元自治体の協同で実施するデスティネーションキャンペーンでは、「うまさぎつしり新潟」と題して食の魅力をメインテーマに各種特別企画が開催される。その中で鯛料理を盛り込んでいくなど、柏崎の名物として定着させるべく計画が進んでいる。その他にも、名僧・良寛と柏崎に縁が深い貞心尼の史跡を、長岡駅からタクシーで出雲崎町（柏崎市へと訪ねる「タクシーで巡る良寛と貞心尼を訪れる旅」を企画（十月から実施予定）。そのための観光ガイドを養成する講座を八月から開講し、ガイド志望の市民が参加している。

「これからは様々な年代層に柏崎の魅力をアピールし、交流人口を増やしたい。また、市と市民が力を合わせて受け入れ体制を整えていきたい」

新生・柏崎をめざして復興計画を推進

中越沖地震の翌年・平成二十年に、柏崎市では一日も早い復興と新生・柏崎の創造をめざし、「柏崎市震災復興計画」を策定した。その中で復興には行政が行う「公助」だけでなく、一人一人が備え行動する「自助」と、隣近所などが助け合い支え合って地域を守る「共助」が必要だと述べている。市民・地域・企業・団体・行政が連携・協力し合おうことが復興の実現に欠かせないとの訴えは、たび重なる震災を体験した柏崎の言葉として重みがある。しかしそれだけではない。苦しい時を乗り越えてきた経験を経て、柏崎は未来についてこう語る。「震災からの復興というのは元に戻るのではなく、新しい柏崎を造っていくことだ」と。力強く歩みを続ける柏崎市のこれからに、ぜひ注目していきたい。